

『古事記』における養蚕起源神話

一馬と蚕をめぐって一

荒川理恵

『古事記』における蚕の起源神話は、五穀の起源とともに、スサノヲノミコトによるオホゲツヒメ殺害の事件によって語られている。

また食物を大氣津比賣神に乞ひき。ここに大氣津比賣、鼻口また尻より、種種の味物を取り出して、種種作り具へて進る時に、速須佐之男命、その態を立ち伺ひて、穢汚して奉じる進るとおもひて、すなはちその大氣津比賣神を殺しき。故、殺さえし神の身に生れる物は、頭に蚕生り、二つの目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき故ここに神産巢日の御祖命、これを取らしめて、種と成しき。(注一)

また、『日本書紀』第五段一書の十一には次のようにツ

クヨミノミコトによるウケモチノカミ殺害の話の中で蚕の起源神話が語られ、さらに養蚕の起りについても言及されている。

是のときに、月夜見尊、忿然り作色して曰はく、「穢しきかな、鄙しきかな、寧そ口より吐れる物を以て、敢へて我に養ふべけむ」とのたまひて、廻ち劍を抜きて撃ち殺しつ。然して後に、復命して、具に其の事を言したまふ。時に天照大御神、怒りますこと甚しくして曰はく、「汝は是悪しき神なり。相見じ」とのたまひて、乃ち月夜見尊と、一日一夜、隔て離れて住みたまふ。是の後に、天照大御神、復天熊人を遣して往きて看しめたまふ。是の時に、保食神、實に己に死れり。唯し其の神の頂に牛馬化爲る有り。顛の上に粟生

れり。眉の上に蚕生れり。眼の中に稗生れり。腹の中に稻生れり。陰に麥及び大小豆生れり。天熊人悉に取り持ち去きて奉進る。時に、天照大御神喜ひて曰はく、「是の物は、顯見しき蒼生の、食ひ活くべきものなり」とのたまひて、乃ち粟稗麥豆を以ては、陸田種子とす。稻を以ては水田種子とす。又因りて天邑君を定む。即ち其の稻種を以て、始めて天狭田及び長田に殖う。其の秋の垂穂、八握に莫莫然ひて、甚だ快し。又口の裏に蚕を含みて、便ち絲抽くこと得たり。此より始めて養蚕の道有り。(注2)

さらに、『日本書紀』一書の二にはワクムスヒの頭上に蚕と桑が生じ、臍のなかに五穀が生じたとする神話がある。

以上の三つの神話のなかで、ワクムスヒの話においては死体からの発生とは明言されていない。しかしこの話も、一般にはオホゲツヒメおよびウケモチの話と同様にハイヌウエレ型の作物起源神話として分類されている。

高木敏雄氏は、食物起源神話のなかでは養蚕の話(蚕・桑)は重要ではなく、後から追加した要素であると主張している。(注3)

また、伊藤清司氏も馬(牛馬)と蚕(蚕桑)という穀

物以外の化生物は後次的に複合された要素であると考えている。その上で、「穀物類が身体の竅穴から発生しているのに対し、蚕は二伝とも頭上から発生しているのであり、その点でやや違和感がある。」と、述べている。(注4)

これに対して、大林太良氏は

「蚕という要素も粟や大豆・小豆などとともに、この型の神話に本来のものであつて、すでに問題の焼畑耕作複合に属していた可能性を考慮に入れる必要を我々に考えさせるのである。」

他方では、もし高木説のように蚕が二次的な追加要素であつたとしても、それがいつ、どこで行われたかという問題が生じる。三伝に蚕が共通して現れることからみて、二次的追加としても、それはかなり早く行われたものと見てよからう。」(注5)

として、その追加がどこで行われたかということに關しては、

「日本においてであつたか、日本に入る前の中国南部ないし南鮮であつたかの問題がある。」

と述べている。(注6)

ところで、中国の養蚕起源説話は、中国東晉時代の『搜神記』に見出すことができ、女性・馬・蚕・桑のモチ

ーフを含む以下のようなあらすじのものである。

大昔、ある大官が遠方に出征し、家には娘一人が残った。この家では牡馬を一匹飼っており、娘は親身に世話をしていたが、一人暮らしの寂しさに父が恋しくなったので、馬に向かつて冗談で「お前が父を連れ帰ることができたら、私はお前の嫁になってやろう」と言った。すると馬は、手綱を引きちぎって走り去り、一目散に父のところへ行った。

父は馬の尋常ならざる様子を見て、家で何事か異変が起こったかと思ひ、大急ぎで馬に乗って帰還する。

父は、馬に餌をやるなどして勞うが、馬は見向きもせず、娘を見るたび喜んだり怒ったりして身をふるわす。不思議に思つた父が娘に事情を聞くと、馬が娘に懸想していることがわかつた。怒つた娘の父親は馬を殺害し、馬の皮を剥ぐ。馬の皮が干してあるそばで隣家の娘とふざけていた娘は、馬の皮を足で踏んで「畜生の分際で人間を嫁に欲しがつたから、殺されても自業自得だ」と罵つた。すると、馬の皮は娘をくるんで天に飛び去り、数日後、大木に糸を吐く蚕となって降りてくる。隣の女房が蚕を枝から下ろして育てたところ、その虫の繭は通常の数倍も糸が取れ、以後農民は競つてこの蚕を飼つた。その木を喪の意味で桑と名付

け、その蚕を桑蚕と呼ぶのはこの伝説による。

『天官』によれば、「辰星は馬である」と有り、「蚕書」には「月がちょうど大火星のところに来たときに、蚕の卵を川の水で洗う」とある。これは、蚕が別名竜精と呼ばれていたように、馬と同じ気からできているためである。

また『周礼』には「一年に二度繭を作る蚕を飼うことを禁止する」とあり、注によれば「およそ二つのものがそろつて大きくなることはあり得ない。年に二度繭を作る蚕を禁じたのは、それが馬を害するからである」といふ。また漢代の礼制によれば、皇后手すからが桑の葉を摘んで蚕神を祀つたといふ。そして蚕神の名は、「苑廡婦人」とか「寓氏公主」とよんだ。公主とは婦人に対する尊称である。苑廡婦人は蚕の先祖である。だから今日でも、蚕を娘と呼んでいる人もあるが、これは昔から伝えられている呼びかたなのである(注7)

この『搜神記』の説話も、一種のハイヌウエレ型説話と言ふことも出来ると思はれるが、この説話で注目すべき特徴的なことは、単純に女神の死体から有益なものが化するのではなく、殺され、皮を剥がれた馬の皮が女性をくるんで飛び去るといふ要素が加えられていること

である。

こうした点に着目すると、『搜神記』の説話の色彩を色濃く残している日本の養蚕起源説話は、前掲の三神話ではなく、むしろまず、民間説話であるオシラ神信仰の祭文があげられるだろう。

我が国民間における蚕の起源説話として先ず挙げられるのはオシラ神のことである。今野圃輔氏は、オシラとは元来は蚕の異名・忌詞であったり蚕のことで、養蚕をしない地方でも、いまオシラ神と呼んでいるこの神を、広く農神として信仰していると述べている。(注8)

オシラ神信仰を大別すると、金色姫型と馬娘婚姻譚型との2つに分類される。

金色姫型説話は、先の『搜神記』の説話とは異なり、また、分布範囲も狭いとされるが、もとは常陸の蚕影神社の縁起から派生した話であり、以下のような継子いじめ譚である。

継母は継子の金色姫を四回の迫害によっていじめ抜き、桑の木で作ったうづぼ舟に乗せて海に流す。漂着し助けられた姫の死後、遺体から蚕が発生し、それによって養蚕が始まる。そして、蚕が4回休眠・脱皮をしたのちに繭を作る理由を、継母による四回の迫害と、うづぼ舟にとじこめられたことに結びつけて説明している。

また、一方の馬娘婚姻譚説話は先の『搜神記』の説話の色彩を色濃く残している。

金満長者とよばれる長者がある。長者夫婦は観音に子授けの願をかけ、女の子が生まれ玉や御前と名付けられる。また、長者は梅檀栗毛とよばれる評判の名馬を飼っている。ある日、玉や御前が馬を見て「これがもし人間だったら、夫婦になりたいほどだ。」と行ってこの名馬の体を撫でさすったところ、梅檀栗毛は玉や御前に恋わずらいをする。長者は非常に怒って梅檀栗毛を殺して棄てる。玉や御前が馬の棄てられた所へ尋ねていき「心があるなら嘶いてみよ」と声を掛けると馬の皮が姫をくるんで昇天する。やがて虫が天から降ってきて、米も麦も、粟も豆も何を食べさせても食べなかつたが、桑の木でできた杖だったので、桑の葉を食べさせると食べた。そして糸を取り、金満長者は日本一の真綿屋になった。(注9)

以上が、オシラ信仰におけるオシラ祭文として民間に残されているものであるが、玉や御前と梅檀栗毛の話は『搜神記』の養蚕起源説話ときわめてよく類似している。このように民間説話の中に『搜神記』の養蚕起源説話に類似したものが見いだされるのに対し、『古事記』『日本書紀』を見渡す時、従来、記紀の神話・伝説は中国

からの伝来が多いと論ぜられてきたのに、こと馬娘婚姻型の養蚕起源の説話に関しては、記紀にはその痕跡が無いのかのように取り扱われてきた。

この点に関して、伊藤清司氏は蚕とよく似た特性を持つ養蚕に関して、漢代の字書の『説文』や『爾雅』には「繅虫」という別名があるということを紹介している。また、蚕神は古来ほとんど女性とされてきたことから、蚕は桑の木に首を吊って死んだ女の死体から発生したという苗族の由来説話を紹介している。そしてその上で以下のように述べている。

「ところで、わが国の記紀の養蚕起源神話そのものには、繅女の要素も馬の要素もなく、中国伝流の両型養蚕起源説話からの直接の影響はみとめられない。しかし、しばしば指摘してきたように、中国のそれらに巧みよみられる女性の死体化生の要素は、わが国の女神による死体化生の神話と一脈通じるものがある。しかも、穀物化生神話のなかで蚕の発生が女神の頭部に位置づけられていることに、もし意味があったとすれば、蚕に馬頭娘の印象がそこに働いてきたことが考えられるのではなからうか。あるいは、また、苗族の養蚕起源に見たような、女性の死が繅首によるとする伝承が、日本にも影響していたと仮定すれば、蚕の発生

部位が女神の首にいつそう結びつきやすかったのではなからうか。」(注10)

確かに、この繅女の要素に着目しての論旨の展開からすると、伊藤氏の説は整合性があり納得させられる。養蚕の糸を吐き、糸と落ち葉などで糞を作り、その中に籠もる習性は蚕に似ている。しかしながら、やはり養蚕起源説話の伝承される動機としては、その昆虫が作った繭から糸を抜き、機を織るといふ、人間の役に立つ有用な昆虫であることが必要であろう。養蚕の糞は糸が絡み合っており、一つの糸口から糸を抽くことはできないといふ。

また、繭などに閉じ籠もり、そこから出てくることに重要な要素があるとすると、養蚕の雌は生涯糞に閉じ籠もったままで、変態する姿を見せないという性質を持つため、蚕に対して投影される宗教的な意味とはやや異なつたものがあるのではないだろうか。また、同時に伊藤氏自身、「『周礼』の短い記事の背後にも、馬の関与する養蚕起源伝承の存在が感得されなくもないが、委細は今後の検討俟ちである。」(注11)と述べているが、ここではあまり検証されていない馬の要素に注目することによって、蚕の起源神話について考えていくことができよう。

先に述べたように、殺され皮を剥かれた馬に注目する
とき、高天原でスサノヲが行った乱暴の話のなかに出て
くる天の服織女の死の話が浮かび上がってくる。

ここに速須佐之男命、天照大御神に白しく、「我が
心清く明し。故、我が生める子は手弱女を得つ。これ
によりて言さば、自ら我勝ちぬ。」と云して、勝さび
に、天照大御神の菅田の畔を離ち、その溝を埋め、ま
たその大嘗を聞こしめす殿に屎まり散らしき。汝、然
れども天照大御神は咎めずて、告りたまひしく、「屎
如すは、酔ひて吐き散らすとこそ、我が汝弟の命、か
く為つらめ。また田の畔を離ち、溝を埋むるは、地を
惜しとこそ、我が汝弟の命、かく為つらめ。」と詔り
直したまへども、なほその悪しき態止まずて轉ありき。

天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣織らしめたまひ
し時、その服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎに剥き
て墮し入るる時に、天の服織女見驚きて、梭に陰上を
衝きて死にき。(注12)

この神話では、既に高天原においては機織りが行われて
おり、養蚕は当然行われているかのような印象を与えら
れる。そのため一層、今まで取り上げてきた養蚕起源説
話のような、『搜神記』に原型を見出され得るものとは
かけ離れた存在であるように見える。

また、『古事記』においては、スサノヲの高天原から
の追放のちにスサノヲのオホゲツヒメ殺害の話がある
ため、一見すると矛盾を感じる。

しかし、卑見によれば、このスサノヲによる忌服屋で
の乱暴、天の服織女の死、そしてアマテラスの天の石屋
戸籠もりと出現という一連の話は、著しい変形が行われ
ているものの、やはり、『搜神記』の馬娘婚譚即養蚕
起源説話の流れを汲むものと考えられるのである。

『搜神記』にもあるように、馬の皮にくるまれて死ぬ女
性の死体からは、それ以前よりも大きい繭を作り、良質
の糸が多く取れる蚕が発生するのであって、繭を作る昆
虫が、今日見られるような家蚕であったとは限らない。
今日一般に「蚕」という時、桑の葉を飼料として屋内
で飼育する家蚕を想起するが、養蚕前史を考えると、当
然野性の桑蚕の繭を採取していた時期があったことを考
えなければならぬだろう。

クワコと呼ばれる野性の桑蚕は、桑の葉を食へて成長
するが、その繭は家蚕に比べればずっと貧弱で、質も安
定せず、また採集に手間がかかる。桑蚕は、その遺伝子
からして家蚕の祖先であり、何世代にもわたる選抜・交
配の結果家蚕が生まれたと考えられているが、桑蚕の成
虫は蛾は家蚕の蚕蛾と異なり自由に飛ぶことができる。

それに対し、家蚕は退化した羽を持ち、人の手で刻んだ桑の葉を与えられるまでは自分で桑の木の枝を渡って葉を食べることもできない。特に雌は巨大な腹で卵を産むとそのまま死んでいき、そして、卵の管理によっては、一年に三〜四回繭を取ることができるといふ。このように家蚕は、人による飼育を前提として飼い馴らされた昆虫である。(注13)

また、蚕以外の繭から糸を引き、織物として利用する昆虫ということからすると、ヤママユガの存在が挙げられる。これは現在一般には天蚕と呼ばれ、椋林を網で覆ったなかで飼育され、長野県の一部などでそれから糸が生産されている。糸は光沢に富み、繭も大型なものではあるが、緑色をして、染色しにくく、何よりも管理しにくいという点で、家蚕に劣る存在となっている。(注14) 以上のような点から考えると、養蚕起源説とは、人の手で改良・管理された家蚕の飼育と、それから取る生糸の生産と特定技術を前提とした説話であることが肝要なのである。

つまり、忌服屋で行われていた機織りが蚕からとる絹糸によるものであったとは限定できないし、する必要もないのである。

このようにみていくと、スサノヲによる忌服屋での乱

暴とは、皮を剥がれた馬を投げ込まれることによって驚いた機織りの女性が、梭で陰を衝いて死ぬという、婚姻を暗示する仕方での死ぬ話であり、まさに、『搜神記』の話と合致する。さらに言えば、既に多くの学者によって論じられているように、天の服織女は、アマテラスの分身とも目されるような存在であるから、これはアマテラスが、殺されて皮を剥がれた馬に襲われて死亡するという話であるとも言えるであろう。

また、織女の死に続くアマテラスの天の石屋戸籠もりは、アマテラスの死と再生の物語でもある。

先に『日本書紀』第五段一書の十一に、

又口の裏に蚕を含みて、便ち絲抽くこと得たり。此より始めて養蚕の道有り。

とあることを紹介したが、これに関して吉田敦彦氏は以下のように述べている。

「実際アマテラスオホミカミが蚕を口に入れて、糸を引き出すということは、アマテラスオホミカミ自身が自分の口から糸を出すわけですから、蚕と同じことをしているわけですね。そして建物にこもって神御衣を織ることもする。そしてそこで織られた神御衣に当たるものが、大嘗祭でも天皇がお召しになる衣として実際に織られるわけですね。

だから、こもること、そして、そこから出てくることに大きな意味があるんで、それはまた太陽でもあるわけです。太陽も夜こもって、また出てくるわけですからね。だから、天皇の誕生、新しい天皇が出現するということは、こもった状態から出るんで、天孫降臨の繰り返しでもあることになるわけでしょうね。」

(注15)

吉田氏も述べているように、アマテラスはこの『日本書紀』一書の十一では蚕自身であるかのような姿を現している。また、『搜神記』に、

皇后手ずから桑の葉を摘んで蚕神を祀ったという。そして蚕神の名は、「菀窳婦人」とか「寓氏公主」とよんだ。公主とは婦人に対する尊称である。菀窳婦人は蚕の先祖である。だから今日でも、蚕を娘と呼んでいる人もあるが、これは昔から伝えられている呼びかたなのである。

とあるように、蚕神は女性であり、尊い女性と結びつく存在であった。

こうした考え方が記紀の編纂時にまだ受け継がれていたという痕跡を示すと思われるのは、このアマテスに蚕のような仕草をさせている箇所だけではない。蚕に関連のある記事は他にも幾つかあり、神代ではないが仁徳天皇

皇の条には大后の石之日売の嫉妬に関する話に蚕が登場する。

まず『古事記』の記述では、天皇が八田若郎女と婚いをしたため、大后は怒って皇居に戻らず、韓人の奴理能美の家に滞在する。そして、大后は三色に変わる珍しい虫（二重繭層）蚕を見に来たのだと、嘘の理由を天皇に伝える。奴理能美は大后に蚕を献上する。また『日本書紀』では、天皇が八田皇女を妃としたいと言ったことに大后が反対して天皇に返す歌に、

なつむしの ひむしの衣 二重着て

田み宿りは あに良くもあらず
というものがある。

この、「なつむしの ひむしの衣」の解釈には諸説あり、「夏の蚕が繭を二重に着て、」という訳がある（注16）が、これを伊藤智夫氏は暑い夏に多く出現する「二重繭層（繭のなかにもう一つ繭ができているもの）」ではないかと推測（注17）している。

表面的なみかたをすれば、この仁徳天皇紀における石之日売は単に非常に嫉妬深い女性にしか見えない。石之日売は臣下の女子で初めて立后した女性であり、八田皇女は仁徳天皇の庶妹であるから、八田皇女に対して特別の敵愾心を持っていたためとも考えられる。だが石之日

売は豊明・神供の酒宴を催す為に采配を振るい、その準備のために自ら船を出すなど高い能力を持つ女性である。そこでまた、ここで『搜神記』に立ち戻って、

蚕が別名竜精と呼ばれていたように、馬と同じ気からできているためである。また『周礼』には「一年に二度繭を作る蚕を飼うことを禁止する」とあり、注によれば「およそ二つのものがそろって大きくなることはあり得ない。年に二度繭を作る蚕を禁じたのは、それが馬を害するからである」という。

という一節に注目するとき、蚕の化身とも言える高貴な女性である天皇の妃が二名いるということは、その夫である天皇の気を乱すという発想が根底にあったためこうした歌を詠んだのではないかと考えられる。すなわち、この石之日売の「なつむしの ひむしの衣」の歌は蚕を妻で、馬を天皇と考えれば、蚕を「回も作るように気を乱すことをすると馬が消耗して良くない」という意味を含んだ歌ではないかと考えられるのである。

以上、馬と蚕のかかわりについて馬娘婚姻譚を中心に据えて考察してきたが、『搜神記』にまで遡れる我が国の養蚕起源説話は、じつはかなり変形された形ではあるが『古事記』のなかにも隠されていたのであると言えよう。

この変形は、アマテラスの皇祖神としての処女性を損なわないために、スサノヲとアマテラスの姉弟姦を直接的に表現するのを避けようとしての変形であったと考えられる。

馬と水神とスサノヲの関係、天の斑馬の斑紋等について十分論じることができないまま紙面が尽きてしまっが、いずれ雷神と桑の関係もふくめて発表したい。

(注1) 倉野憲司校注『古事記』岩波書店 文庫版 三八頁

(注2) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀』岩波書店 一〇二頁

(注3) 高木敏雄『日本神話伝説の研究』『日本農業神話』荻原星文館 四六五―四七四頁

(注4) 伊藤清司『日本神話と中国神話』学生社一〇四―一〇五頁

(注5) 大林太良『稲作の神話』弘文堂 五三頁

(注6) 同前 五三頁

(注7) 干宝 竹田晃訳『搜神記』平凡社東洋文庫二〇二六―二〇二八頁参照

(注8) 今野圓輔『馬娘婚姻譚』岩崎美術社 三頁

- (注 9) 同前 一五五～一五七頁参照
- (注 10) 伊藤清司『日本神話と中国神話』学生社
一〇四～一〇五頁
- (注 11) 同前 一〇五頁
- (注 12) 倉野憲司校注『古事記』岩波書店 文庫 三五
～三六頁
- (注 13) 岸田功 『かいこくまゆからまゆまで』
あかね書房他参照
- (注 14) 中嶋福雄監修 穂高北小学校郷土研究会
『みどり色のまゆーぼくたちが調べたヤマコの
一生』他参照
- (注 15) 大林太良・吉田敦彦・松村一男「天皇制の神話
学」『日本学』一九八九年五月号。『名著刊行会
二三頁
- (注 16) (注 2) の 三九八頁
- (注 17) 伊藤智夫『蚕工』法政大学出版会 六四頁